

かさおか

発行所
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66-1311
FAX 66-1314



初代の心にかえり信仰の喜びを
深めよう 伝えよう 広げよう
一、持ち場立場で日々理作り
一、家族揃って教会参拝
一、一日一件にをいがけ

立教172年
6月号

旬の声を身近に感じ 我が事としてつとめる

六月祭典講話 世話人 島村廣義 先生

「教祖年祭の意義」を推す

水を差すわけではありませんが、何のために創立記念祭をつとめるのでしょうか。

本部からつとめよと言うからか、あるいは、他の大教会が皆やっているからでしょうか。

記念祭というのは、そういうようなものでは決してないはずですよ。

笠岡の理に繋がる者として、「やらせてもらわずにはおれない」という気持ちからつとめるのが、この記念祭だと私は受け止めています。

「やらせてもらわずにはおれない」というその心は、そこに「成人しよう」というお互いの気持ちが見られたものだと思います。

そういう意味で、このことを思うに付けいつも思い浮かぶのは、教祖百年祭をつとめ終えた後、真柱様が「教祖百十年祭、つとめようか、つとめようまいか、本部員なりに、直属教会長なりに、自分の思案するところを書面で出して欲しい。」と仰いました。

私は「教祖がお姿をお隠しになるに至った

その理由を考えると、

道の子どもとしてはど

うしてもやらせてもら

わずにはおれないという気持ちでは是非お願いした

い」と書いて出した方が大半だったと想像します。

立教百五十六年年頭のご挨拶で、真柱様は、ご

自分の思いを披瀝して教祖百十年祭をお打ち出さ

れましたが、その時のお言葉のポイントは、

・数年前に、つとめようか、つとめようまいかと、

皆さんの意見を書面にしていたら、それか

らずと、それを心に温めながら考え続けてき

たが、いよいよつとめようと決心した。

・その心は、成人しようということは、何も教祖

の年祭に関わらず、常に私たちの心せねばなら

ないことであるにも拘わらず、そうしたことは

分かっていても、何か目先に仕切り・目標がな

ければ、なかなか重い腰が上がらないというこ

とは、人の常である。

・また、自分一人がなんぼ力を出し切っても一人

の力には限度がある。一人で二人の力を出すに

は骨が折れるが、二人心を合わせれば、難なく

二人の力が出る。そうしたわけで、十人なら十

人、百人なら百人、数が大きくなればなるほど、

一人では到底及びも付かない力が、大勢の力を

寄せることによって出る。私はここにかねがね

から教えられる一手一つになるという大切さを

改めて気付いたような気がしました。

・一手一つになる・仕切って事を運ぶことによっ

て、やはり常々心には思いながらなかなか運ぶ

ことのできない、そうしたことを未然に防いで

少しでも最小限度に止め、むしろそれを最大限

に活かすことによって、成人へと少しでも事を

運ぶことができるのではないかと考えたとき

に、かねて十年を一区切りとしてつとめてきた

過去のどの年祭を取り上げ、その足跡から考え

てみても、やはり仕切って、一手一つに心を揃

えて事を運べば、運んだだけの「実」というも

のは、多かれ少なかれそこには残っていたたく

ことができるということを、心に思ったので、

教祖百十年祭もやはりつとめようと、こういう

事に決心をした。決意をした。

というような内容でした。

お姿をお隠しになった事情について、どうい

う親心があったかということは、子供の成人をお急

ぎ込みくださる親の思いに、私たちがいかにお応

えするかということに尽きると思います。

そういうところから、真柱様も、個々に成人し

たいという常々の思い詰める気持ちを尊重し増幅

させて、普段思いながら中々成人を果たせなかつ

たその一点を絞って目標を定めて、みんなが心を寄せ合って、力を合わせ合力する。一手一つの合力によって大きな成果をご守護いただける。成人の実を上げるといふこと、これと思うと、やはり、年祭というものはつとめねばならない、自分たちの気持ちとしてどうしても教祖のお心に応えしようとするならば、年祭をつとめずにはおれない、というところから決意したと、お聞かせいただくのです。

私たち自身がつとめる大教会の創立記念祭も、このことと同じ心を通ずるものがあると、私は思います。

教祖年祭後の記念祭のつとめ方

全教としては、各年祭を一つの区切りとして成人を目指していますが、その中において、笠岡大教会というのはラッキーな教会だなあと感じます。

笠岡だけでなく、うち(高知)も明治二十四年の設立です。同じ思いですが、ちょうど年祭と年祭の中間点に創立記念祭をつとめる。中間地点に位置しているんですね。

私は先輩から、年祭に向かう五年と年祭後の五年をどうつとめるか、ということをよく仕込まれました。

「年祭に向かって」は、それぞれ普段できなかったことを、一番理の重いところからそれをご守護いただいて教祖にお喜びいただこう、成人の実を上げようと、とにかく集中してやって、頑張る年祭活動をつとめます。

そのつとめたことが、実際に自分の力・教会の力として、本当に身に付いているかどうか。その身につける期間が「年祭後の五年」であり、そして、それを記念祭に向かってやり遂げるんだと私は思います。

さらに、記念祭をスタートとして、百三十年祭に向かってまた新たな歩み出しを始めるのが、大教会の記念祭からの歩み出しだと、私は位置づけています。

そういう意味では、二十四年に設立された教会は大変ラッキーな教会、心が定めやすいということとで、私は「仕切り」ということについて、そのように受け止めています。

一手一つの和

年祭活動、また記念祭の活動をつとめるについては「一手一つの和」「一手一つの治まり」というものが一番大切なことで、それが一番神様に受け取ってもらえ、また、一番大きな力を生み出す元になると、真柱様は仰いました。

そして、何が、その一手一つになるひながたかと言えば、元の理の道具衆の方々の姿を学べばよい——元始まりのお話で教えられたのは「一手一つの和」であるとお諭しいたします。

「一手一つの和」というのは、何もみんなが同じ事をするというわけではありません。それぞれの持ち場立場で、自分のつとめをしっかりと全うするということでしょうが、心と態度を、要は芯に合わせ揃えて、同じ目的に向かって突き進むことだとお教えいただきます。

与えられたそれぞれの御用を一生懸命つとめることから現れてくる姿こそが親神様のご守護だと受け止め、それぞれが芯にしっかりと心を寄せて目的を果たすべくつとめ合う、もしその中で足りないところが出てきたら周りがそれを補って、不十分を十分となるように目的を果たしていく、その上で補い合い助け合うところに一手一つの和があると仰せいただきます。

仕切りをもってつとめる教祖の年祭、また教会の記念祭について、私は特にそういうことを感じます。

仕切つとめる

仕切つとめるということについては、元の理のお話の中では、たいしょく天のみこと様のお

はたらきです。

それは、親と子の胎縁を切り、出直すときは息を引き取る世話ですが、かんろだいつとめでの位置を思案すると、かしこねのみこと様が相對しておられます。

「切る」ということを忌み嫌う人もありますが、切るといっておはたらきがなかったら、新しい命は生まれてきません。

「破水」「臍の緒を切る」というようなことから親と子の胎縁を切り、そのときから、今度は「呼吸」、息吹き分けを始めます。まさしく、切る理と合い向かい合っている一つのおはたらきによって命の誕生があります。

そういう人間誕生、一つの物事の生まれ出しに当たっては、「切る」といっておはたらきがいかに大切かということでした。

今までの自分のいろいろな活動・暮らし向き、それを改めてやり直そう——初心に返って、また、新たな決意を持って歩み出そう——というときには、生命誕生に等しい大切な旬・時と考えて、「切る」「思い切る」ということは、どうしてもなくてはならない行動であり思案だと思えます。

心の向きを変える、新たな門出をするというときには、一度、過去の繋がりがからすべてを断ち切つて、そこから新たな出発をすることが大切です。

また、その「切る」ということも、旬というものがあり、親神様のご守護を得た時というものがなければ、その決断も意味がありません。

かぐらづとめでは、十八回終わったら合図木が入りますが、それからたいしょく天のみこと様のお手が変わります。切る理をお現わしになって、いよいよ出産というご守護を頂戴するはたらきに手振りが変わります。

いつでも、何でもかんでも切ったらよいというものではなく、切るタイミング、切る時期・旬というものがある。それが、年祭活動であり、また、それが創立記念祭なら創立記念祭に向かう定めた私たちの活動期間である。このように悟らせていただきます。

ここぞという時の決断、旬を外さないことが大切です。それでこそ、「節から芽が出る」とお教えいただき、また「仕切り根性・仕切り力・仕切り知恵」と仰せられるように、そこに大きな力をお与えいただき、また、みんなの心が寄せ合える、そんなご守護に繋がっていくのではないのでしょうか。

記念祭をつとめる意義

さて、私は「記念祭」を考えるのに、三つの要点を思えます。

・元にかえる

一つは、「元にかえる」ということ、元を知ること、これが大切です。

もちろん「大教会」の百二十周年ですから、「大教会の元一日をたずねる、初代の会長様・先生方が通られた道すがらをしっかりと思案する」ということになりましたが、大教会のことだけを考えると身近なものになりませんので、むしろ皆さん方の入信の元一日——それぞれがお道に引き寄せられたときの元一日——の心にそれぞれが立ち返ること、これがまず記念祭をつとめるに大事な事柄だと申したい。

・反省する

真柱様も前述のお言葉の中で、「百年祭までは本部からの打ち出しに皆が心を寄せるといふ形でつとめてきた。しかし、百年祭までつとめたのだから、今度からは言われなくても、自らが求めてつとめる年祭にして欲しい」といふふうに仰いました。

そういう上から考えると、入信初代なら自分がたすけられたときのこと、親・先祖からの信仰を引き継いで身なら、先祖がたすけられた元一日・今日までの道すがらを思案してみるのが大切です。

初代の道・入信の元一日に立ち返り、おたすけ

いただいたときの喜びをどういう形でご恩報じされたのか、どのように初代が心を定めて通ったか、その心定めがどういうふうに行き渡ってきたのかということをしつかり振り返る。

そこから、自分の今日ある姿をつぶさに反省する——自分がどうしているのか、初代の心そのままに、自らも通っているのかということですが、その「反省をする」というのが二つ目。

・心を定めて通る

そして、もう一つは、反省するだけではなく、これから先をどう通ろうかと、しっかりと「心を定めて通る」ということです。

「古き道があればこそ、新しい道という。親があるで、子があるという理を考えれば分かるやろう。」とおさしづにもありますが、初代以来、先人たちが歩かれた道すがら、その道すがらなくして、今日の理の栄えはあり得ません。

ここに思いを致すと、心よりお互いに感謝の誠を捧げると共に、これから私たち自身もその先人たちに続いてその道を通らせていただくと共に、自らが通るだけではなく、それをまた、末代にわたって受け渡しをする。より大きく、また、より広く伝え広めていくという事をお誓いせずにはおられないのです。

これが、記念祭をつとめる意義だと思います。

そういう上で、あそこに書いてある活動方針は本当に素晴らしい。あれをお題目だけではなく、実際にこれから三年千日しっかりと通りたいだけで、その実を上げ、一つ教祖にお喜びいただく。その実を持って、今度は、教祖百三十年祭への歩み出しをするということが、記念祭をつとめる最も大切なことだと思います。

●神様中心の日常生活

・家族ぐるみで教会へ参拝

今年の春の大祭で、真柱様は、家族ぐるみで教会へ参拝しようという三会からの提言を取り上げてお話しされました。

提言されて二十年、年限に相応しい実をご守護いただいたかどうかを問いかけられたわけですが、それぞれに、いろんなところで不思議なご守護をいただいていると思います。

私の部内でも実際こういうことを見せていただきました。

ある夫婦ですが、ご主人は全然信仰がない。奥さんが代々の信仰を受け継いで、信仰のないご主人へ嫁がれた。結婚されて二人の子どもがいますが、離婚の危機に追いやられた。

奥さんの方が、実家のお母さんに連れられて、何年ぶりに教会へ行きました。

会長さんから「自分の心が変わらなないと治まらない。修養科に行ったら、あなたの心が変わり、ご主人もこっちを向いてくれる。」と説き伏せられて、末の娘を連れて修養科に入りました。

主人は、五才になる上の男の子を保育所に預けながら、会社につとめていた。

奥さんも言われるままに修養科に来て、三月になった頃、主人の方が息子を迎えに保育所へ行きました。自分の子が見当たらない。探してみると、保育所の便所を一生懸命掃除していました。

「何してるのか」と尋ねると「お父ちゃんとお母ちゃんと仲良くなってもらいたい」と五才の子が言うのです。

これにはもう父親は参ってしまいました。年端も行かない子が、両親に仲良くなってもらいたいからといって、毎日、一生懸命便所掃除をしていて、それを聞いたお父さんが、それを奥さんに伝えました。

奥さんもビックリしました。世間では、便所掃除をしてもらった方が「ありがとう」と言うのに、天理教では、便所掃除をした人が「させていただいてありがとうございます」と言う。天理教は世間と全然違うと気がつきました。

ここから、ころっと変わりました。

お母さんの心が変わり、お父さんもこれを切っ掛けに教会へお参りに行くようになりました。

今は、お父さんもよぶべくになり、教会のお祭りの前日から家族連れで泊まり込み、「教会にくてはならんご家族」になっています。

何が「一つの吉祥」になるか分かりませんが、「家族ぐるみで教会に参拝」している本当に結構な姿をご守護いただいたお話しです。

奥さん自身も、二十年近く教会へ行っていないかった。離婚の危機に遭遇して、お母さんに連れられて教会へ参ったことから始まり、また信仰を取り戻した。

やはり、常日頃神様と疎遠になっている。神様と心が離れてしまうと、ご守護の道が塞がって行くわけで、常に神様を中心にして日々の物事が成されていくと、いろいろと結構をお見せいただくと思います。

・天理時報をよぶべく家庭へ

また、今、仕切って仰るのは、「天理時報を全よぶべく家庭へ」ということ。特に、先の大会で表統領は「名称で三部増部しよう」と提唱されました。

「教会へ家族ぐるみで参拝しよう」と呼びかけるのもそうですが、教会からよぶべく家庭へ働きかけ、足繁く心を繋がなければ、よぶべく・信者も教会へ足が向かない。そのためにも、天理時報を手だてとして「手配りで行きたい」と仰います。

大会のときに放映されたビデオの中で、布教経験がないときに「これがお前の仕事や」と前会長さんから言われて、信者家庭へ天理時報を届けることを自分の仕事として、今日までずっと続けている会長夫妻がありました。

大したものだと思います。

週一回出るわけですから、月に少なくとも四五回、よぶべく・信者家庭を訪ねる。そうすると、その家庭の有様が心につかめ、深い絆が刻まれ、自ずと信者さん方も教会に繋がってくださる。

天理時報を通して、直接おちばの空気が伝わるということも、大切なご用だと思えますが、やはり、神様を中心にした「家族ぐるみで教会へ参拝しよう」という一つの運動の中に、そうした「天理時報」も大きな手だてとして活用できると思えます。

そういうことで、今おちばから打ち出されていることを、お互いに私たちの歩み方の一つの指針にさせていただきたいと思えます。

●銘々が人材育成に尽力を

最初に申した「年祭後の五年」・「年祭に向かう五年」ということですが、教祖百二十年祭の活動を進めるに当たって、表統領は「人材育成」に一番力を入れました。

「よぶべく名簿」上はたくさんいるけれども、それぞれが、教祖の親心にしっかりお応えするよぶべくとしてのつとめが本当に果たしているかどうか。数はあっても実動よぶべくというのは本当に心許ない。おさづけを戴いてからの一歩進んだ成人ができていない。これを憂うと、なんとかよぶべくに成人してもらえないか。修養科に行けばよいが、なかなか修養科にも行けないところから基礎講座が始まり、三日講習会が始まり、また「よぶべくの成人」ということに力点をおいて、本部の講習会の見直しをしたられました。

それが力になって威力を發揮するのは、百三十年祭活動であったり、百四十年祭の活動だと思いますが、私は、銘々の教会にあっても、一緒だと思います。

百二十年祭の活動として「人材育成」に力を入れてきた全教の動きを、笠岡大教会も百二十年記念祭に向けて維持継続し、「人材育成」に力を入れ、その育った人材を以って百三十年祭の活動を大きく歩み出しをするということが大切だと思います。

一つ、みんな、心(親神様・教祖)に心を合わせ、芯にしっかり結ばれて、一手一つに成人の実を上げてもらう、これを今日はお誓いすること、これが決起大会の意義だと思えます。

《以上要約》

目に青葉 盛んに活動 青年会

5月1日から24日にかけての、「おやさとふしん青年会ひのきしん隊第746回隊」に、青年会笠岡分会から、4名が入隊し(上原繁次・佐藤真理志・中村剛史・重政理治)、おやさとでの様々なひのきしんにあたりました。

今回のひのきしん隊では、旧豊井ふるさと寮の解体、第2母屋・第15母屋の改修、全教ゲートポール大会の会場準備、蛇谷山ひのきしんなどを行いました。

朝晩の気温差が激しい1ヶ月でありましたが、新型インフルエンザの影響もなく、みな勇んで、無事に通らせて頂きました。

入隊してくださった皆さんをはじめ、教会の方々、お心寄せを頂いた皆様、ありがとうございます。紙面をかりてお礼申しあげます。

来年の担当月は、まだ決まっておりませんが、また次回、一人でも多くの方と入隊し、何とか心定めの人数をご守護頂きたいと思っておりますので、よ

また、にをいかけでは、八木大教会周辺に赴き、神名流し、路傍講演、戸別訪問を勤めました。

ろしくお願いします。

また、去る5月31日にひのきしん団参を行い(高屋ブロックは30日より)、青年会員をはじめ、家族づれ、本部勤務者、管内学生など、およそ100人が参加しました。

当日は雨天のため、ひのきしん場所を変更して、東西礼拝場階下と、中庭に面する格子や楼門の掃除を行いました。

参加者は下足箱やすのこ板、床や階段など、普段、参拝者が利用する場所を、丁寧に拭いていきました。

また、詰所でも、植木の剪定や構内の清掃などを行い、多くの方が、おちばでひのきしんに汗を流しました。(青年会委員長 上原繁次)



修養科終了生の声



母と歩んだ修養科生活

福芦分教会 佐藤 ひろみ

私は、身上を頂いている母と一緒に修養科に出させて頂きました。

初め私は全く出る気がなくて、出ないつもりでいました。でも、周りの方々の勧めがあり、ギリになって決断しました。

それを母に言うと、「ひろみが一緒に行ってくれるなら」と、初めは言ってくれていたのですが、三ヶ月間家を離れるのはすごく不安だったみたいで、「やっぱり行かん。怖い」と、調子を崩し、二十七日の朝、ギリギリまで悩んでいました。でも、「私がついとるけん大丈夫よ」と言っていて、なんとか行く気になってくれて、一緒に家を出ることができました。

母の身上は精神的なもので、何気ない言動が気になって調子が悪くなります。だから私も「大丈夫！」とは言いたけれど、すごく不安でした。

初めの内は何をすればいいのかわからないし、初対面の方と一緒に過ごす必要なければいけないので、時間が経つのが遅く感じて、三ヶ月は長いと思っていました。

でも、詰所の方々や、教養掛の先生、同じ修養科生、みんなすごく良い方達ばかりなので、本当に安心しました。

修養科に入って、何度か母の調子が悪くなったのですが、その度に皆が良くしてくださるので、心強かったです。

それに皆笑顔がいいので、それにつられて、母もだんだんと笑顔が増え、入ったばかりの頃と比べると表情がかなり良くなりました。

修養科では友達も増え、毎日が楽しく、同じクラスの中には本当にいろいろな方がいるので、いい勉強になりました。それに、私が母への接し方で悩んでいる時に、アドバイスをくれて、心が軽くなったりもしました。

長いと思っていた修養科生活は、一ヶ月目、二ヶ月目、三ヶ月目と過ぎていく内に、思っていたよりも、かなり短く感じるようになりました。

五月十九日におさづけの理を戴き、私はようやくになりました。

その日の夜、詰所に帰り、おつとめ着のまま、最初は母に、次に修養科生のおばあちゃんにおさづけを取り次がせて頂きました。

ずっと満席の状態のままですトップしていたので、これでやっと一人前になりました。

私は母が身上でなかったら修養科に来ることは無かったと思います。だから母に感謝しています。

この三ヶ月間、辛いこともあったけれど、毎日楽しく過ごせたので、本当に良かったです。

一生の友達、大切な思い出が出来ました。

祖母と二人三脚で歩んだ修養科

神昭分教会 渡邊 いづみ

私は一年前から、修養科に祖母と一緒に志願できたらいいなと思っていました。

祖母は喘息の身上で入院していたので、志願できるか分かりませんでした。が、ご守護をいただき志願することができました。しかし、祖母の喘息はひどく、修養科に行けない状態で、私は毎日、おさづけを取り次がせてもらうことを心定めしました。

二ヶ月目に入り、私自身が疲れや不足が出て、身上を見せていただきました。

その後、祖母が肺炎で入院することになり、いろいろと考えさせられました。

毎日、クラスの担任の先生、クラスの方が祖母のために病院に足を運んで、おさづけを取り次い

でくださり、「身上をいただいたことを喜びなさい」とお教えくださいました。

祖母は毎日、喜んで通っていると、一週間ほどで退院することができました。

退院してからの祖母は、喘息も出なくなったり、また、足が悪く、おつとめをする時、正座ができなかったのが、だんだんに正座ができるようになったりと、すごく元気になりました。

修養科で、祖母も私もいろいろと身上を見せていただき、その中に親神様・教祖よりたくさんのご守護をいただくことができ、修養科に入り、本当にありがたかったなあと思わせていただきました。ありがとうございます。

修養科生活を振り返って

久松分教会 中村 美恵

修養科というものは、私にとって嫌なイメージしかなく、親からも修養科に行けと言われても断って、一生行くつもりはありませんでした。

今回、修養科に来させていだいたきっかけは、親孝行がしたいという思いからで、今まで自分勝手な事ばかりして、迷惑をかけてきたけれど、いつも優しく私を受け入れてくれた親に感謝と、少しでも喜んでもらいたいという気持ちになってき

ました。

自分でも、そんな気持ちになったのは不思議ですが、これも神様からのお手引きなのかなあと思っています。

修養科生活中は、いろいろ学ぶことも多く、不足に思ったり、なんでも喜んでつとめさせていただくという気持ちになれない日もあったけれど、いろいろな人と出会い、話を聞かせていただいて、自分自身勉強になったし、お道につながっている喜びを初めて感じました。

修養科に来ている間、数え切れないほどの方にお世話になり、この場をお借りしてお礼を言わせていただきたいと思います。ありがとうございます。

修養科中に、心に残った言葉は、

心が変われば態度が変わる
 態度が変われば行いが変わる
 行いが変われば運命が変わる
 運命が変われば人生が変わる
 なぜならご守護が変わるからです。

これからも、「おいしい、ほしい、にくい、かわい、うらみ、はらだち、よく、こうまん」の八つのはこりを払うことにつとめ、修養科で教わった教えを忘れず、おつとめに励み、ようばくとして、神様の御用をさせていただきたいと思えます。

・原・稿・募・集・

内 容

①小随筆 ②教会・布教所の独自の活動の紹介
 ③俳句・和歌・川柳 ④教会行事開催後の報告記事 等々

字 数

1000字前後(800字~1200字)
 題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。
 俳句等は1句からでも結構です。

寄 稿 先

下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江377

FAX：0865-66-1314

メール：tenkasa@yahoo.co.jp

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。



談話室



修養科教養助員のつづき

(教養日誌より)

教養掛 藤本芳久

4月25日 着任。修養科生は女子ばかり5名。教養助員の仕事は、お茶作りとゴミ集め、夜の門衛他。教養掛とは名ばかりで、まるで男子修養科生!

4月29日 全教一斉ひのきしんデー。教養掛は大教会長様、奥様、詰所勤務者の方々と、北庭プール周辺のひのきしん。草より人の方が多いような気がする。

4月30日 修養科生全員、おてふりの覚えが早く、本日より12下りのお願いつとめをつとめさせて頂く。また、修練後、修養科生同士でおさづけの取り次ぎも始まる。(それまでも各自の部屋で取り次

いでいた様子)

主任先生いわく、今期の修養科生はスーパー修養科生だ!

5月2日 85歳の頑張り屋のおばあちゃん修養科生さんは、ぜんそくの身上で、また、足が悪く毎日椅子に座っておつとめをしていた。が、12下りを通して踊れるようになり、また、おさづけを受けられる時、急に正座が出来るようになった。おさづけの効能とぢばの理を目の当たりに見せて頂く。おぢばって素晴らしい!

5月18日 関西地方に新型インフルエンザの嵐が吹き荒れる。修養科修了まで、あと10日。この嵐の渦に修養科生が巻き込まれなければいいがと一抹の不安がよぎる。でもこれを乗り切るため、本日より10日間、修了まで毎日違った目標を掲げ、それを実行することにより全員無事修了させて頂くとうと誓い合った。ちなみに本日の目標は、「気合いで乗り切ろう!」。

5月19日 おさづけの理拝戴日。今までおさづけを戴いていなかった修養科生1名が無事おさづけの理を戴く。おさづけの理を戴いて帰所後、おつとめ着のまま、すぐに2名の身上者におさづけを取り次ぐ。取り次いだ方も取り次がれた方もとても嬉しそう。ブラボー!

5月20日 大教会創立百二十周年決起の集いのため、主任、助員共、帰笠。2日間修養科生だけで過ごす。皆しっかりしているから大丈夫だろう。

5月21日 決起のつどいを終え、午後9時過ぎ帰所。修養科生は自主的に修練もつとめたと聞き、一安心。皆ありがとう!

修養科修了まであと一週間を切った今、皆元気に修了させて頂くと共に、三年先に迎える大教会創立百二十周年記念祭の時には、それぞれの教会に無くてはならないようばくに成人してくれていくものと信じます。

素晴らしい修養科生、主任先生をお与え頂き、あわただしくも、充実した毎日を送らせて頂き、共に成人させて頂けた貴重な一ヶ月間であったと思いつつ、ペンを置かせて頂きます。

五月月次祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様には一列子供の陽気ぐらしを楽しみに 変わらぬ親心と御守護のまに／＼日々は結構に天然自然のお働きと身体の自由の御守護を賜り陽気ぐらしへとお導き下さっており 中でも今は「目に青葉 山ほととぎす 初鯉」と歌われる程の身にも心にも優しい旬をお与え下さっております事は誠に有難く勿体ない極みでございます しかしその一方で 心の自由を許されていくが為にその使い方を誤り 世界的な経済破綻や新型インフルエンザ又人間同士の争い等に苦しまなければならなくなっています事は誠に残念でなりません 私共は「月日にハセかいちうゝハみなわが子 たすけたいとの心ばかりで」との真実の親心に触れ その思召に応えさせて頂きたいものと 教祖ひながたを心に日々は朝夕に御礼申し上げつつ つくし運びの理作りに励みにをいがけおたすけを通して 世界たすけの御用の上に勤めさせて頂いております

その中にも今日の吉日は理のお許しを戴いた御祭日でございますので 先月新たに加わりましたおつとめ奉仕人共々 心を一つに睦び合って明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて 五月の月次祭を執り行わせて頂きます

御前には今日の日を楽しみに寄り集い 同じ思いに伏し拝み 共々にお歌を唱和する皆の真実の状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいます ようお願い申し上げます

又本日は世話人島村廣義先生にお越し頂き 祭典に引き続き 大教会創立百二十周年決起の集いを開催させて頂きます 本年から三年千日と仕切って新たな成人の歩みを進めさせて頂くべく 一月に直轄教会へ 二月三月は部内教会へ更に又今月は直轄教会へとその徹底を計ってまいりました 大教会から部内へと流れた理に対する思いを 今度は部内より大教会へと結集し 一手一つの思いを更に固めて 共々に旬の成人の歩みを進めさせて頂き 一人でも多くの人に喜びと感謝の気持ちをお伝え 加えて今の時代だからこそ親の心に触れ親心に応える生き方をする事の大切さを伝えるべく 一条の御用の上に邁進して行く覚悟でございます

何卒親神様にはそうした皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして 万たすけを通してますます親の心を感じ取らせて頂き 人々の成人をより早めて 理の弥栄えを御守護下さりお望み下さる陽気づくめの世の状に 一日も早くお導き下さいますよう 一同と共に慎んでお願い申し上げます

こころの詩

東悠分教会前会長夫人 田林 美智子

古都ゆかば青葉若葉が重なりて

白雲走る朱の大鳥居

鎌倉にて

▼表紙の絵

福満分教会前会長夫人 福島悦子さん

▼4コマ漫画 大教会 上原元子さん

大教会だより

◎第815期修養科

自 立教172年3月1日
至 立教172年5月27日

*教養掛

三ヶ月間 門脇 元教

(島根分教会長)

一ヶ月目 田林 久嗣

(東悠分教会長)

二ヶ月目 竹本 和道

(福芦分教会長)

三ヶ月目 藤本 芳久

(東水島分教会長)

*修了者

| | |
|----|-------|
| 久松 | 中村美恵 |
| 神昭 | 渡邊スエノ |
| 神昭 | 渡邊いづみ |
| 福芦 | 佐藤直美 |
| 福芦 | 佐藤ひろみ |

◎教会长資格検定講習会修了者

| | |
|----|---------------|
| 前期 | 立教172年5月14日終講 |
| 島根 | 辻井 万喜子 |

◎本部食堂ひのきしん

| | |
|--------------|--------------|
| 自 立教172年5月1日 | 自 立教172年5月5日 |
| 至 立教172年5月5日 | 至 立教172年5月6日 |
| 國須 瀧谷昌代 | |

計報

| | |
|---------------|---------------|
| 至 立教172年5月10日 | 至 立教172年5月15日 |
| 上 下山野なつ | 上 備田 渕忠明 |

森本浪江姉

大教会おつとめ奉仕人
海松ヶ岡分教会前々会長
六月一日出直されました。
享年 九十一才

笠岡五人衆四小間劇場

番外編「西の年齢」



番外編おわり

編集後記

自然は移り変わるものと相場が決まっています。目にも心にも頼もしく映るものである。

大教会機関誌『かさおか』編集掛もここにきて任期満了を迎え、悲喜交々とは申さぬまでも、それはそれは長い任期中の幾多の編集会議や作業が走馬燈の如く思い巡り、表紙を飾ってくださった皆様、ご投稿くださった皆様、また、編集の労を担われた編集掛諸氏に深甚なる謝意を表したい。

晴れて放免になる人、請われて繋ぎ止められる人、いろいろではあるが、いよいよお頭(芯)が変わる。

「変わる」ときは出直し(生まれ更わり)の句であり、それは再構築(更生)の時である。マンネリ防止のためにも、こういうときにこそ、ある種、破壊的な進め方が望まれる。

言うは易く行うは難し。野党からの意見は押し並べて破壊的なものであるが、最近では与党も野次を飛ばす始末であるから、物事の治まる道理がない。

須く、心は芯に寄せ、一手一つにつとめるべきである。(お)